

るようにした。太子は見て、女の人がこんなことだと、と、腹痛だといつて還つた。夫人は、わたしはともたのしかつた、と言つた。太子がおもうには、わが母上さえこんなことだ。ましてほかの女は。夜になると国を捨てて山中に入りあちこち見て歩く。と、道辺に大樹があり、下にきれいな泉がある。太子が樹に上る。ふと仙人がひとりでやって来て、池で水浴し、食事をし、術を使って一つの壺を吐き出した。壺の中には女がおり、へ女人とキャンプをとり出し、キャンプの中で仙人は女と寝た。へ仙人が眠るとへ女人もまた術を使って一つの壺を吐き出した。壺の中に年少の男がいて、またいっしょに寝た。了ると女はへ少年を収めたへ壺をのみこむ。と思うと仙人が目をさまし、壺の中に女人を収め、そいつをのみこむと杖をついて去つた。太子は国に帰り王に申し、その仙人と諸臣下を招き、三人分の食事をひとところに用意した。仙人がやって来てへ用意された食事を見て、わたしはひとりだ、と言つた。太子がいう。仙人よ奥さんを出していっしょにおあがりなさい。仙人はやむなく妻を出した。太子が女にいう。男を出していっしょにおあがり。再三いわれて、やむをえず男を出しへ三人は、共に食事をして、去つた。王が太子に問う。お前にどうしてわかつたのか。答えていう。わたしの母が國中を見たがったので、わたしが車を運転しましたが、母は手を出して人に見せました。わたしは女人がそんなに欲望が多いのかともい、腹痛だといつて還り、山に入り、この仙人を見たのです。かれは妻に姦通させまいとして妻を腹中にかくしたのでしょうが、このように女人の姦通は絶やすことはできません。どうか王よ宮中の人たちが自由に往来できるようにしてください。王はそこで後宮中の女に行きたい者は行かせることにした。師いわく「天下ニ信ズベカラザルハ女人ナリ」と。

以上がその話である。わたしがかつて読んだのは父の蔵書の『仏教信仰実話全集』（昭和六、七年刊）か何かだったろう。訳者は中央アジアのサマルカンドに祖先をもち、代々インドに住み、商人の父にもなわれて交趾に移り、十余歳で両親に死別し、出家し、三世紀のころ建業（今の江蘇省江寧）に来て伝道・訳経に従った。この経は『高僧伝』等に見える。「師曰」としてときどき話の終りに格言をのせるが、それがおおむねつまらないのは、後人の付加かもしれぬ。

李賀はこの経を読んでいた、と思う。そうして「残米曲」を作るとき、この経を胸においていたに違いない。もしかれの読んだこの経にも「師曰」がついていたとすれば、何というくだらねえ師だ、と笑ったことであろう。わたしの中には、この話に出てくるへっぽこ仙人のようなケチくさいところがあるのを自覚するだけに、「残米曲」を作った李賀のやさしさがいっそう心に沁みる。なお原文の「手」というのはインド（であろう）のテキストでは「足」「ふともも」などであったかもしれぬ。あるいは「女陰」とはつきり表現してあったかもしれぬ。中国語に翻訳されるとき、中国人の神経を逆なでしないため、こうした処置がとられたことは、先人がすでに説いている。

（一九八三年七月二十九日一三五〇）

満 紅 紅 ・ 夜 遊 宮

一九七九年九月九日、饒宗頤『選堂詩詞集』（一九七八年刊）を入手、その日のうちに一読了し、李賀にかか

わる詞二首を写した。ここにその二首と別の一首を転載する。「滿江紅」は同書一九九頁、「夜遊宮」の二首は二二頁。

滿江紅

讀品谷詩

日上三竿，休報道先生睡足。偶墜向、文章劫裡，碧絳盈束。年少空教簾化淚，蹉跎早是髣生肉。但徘徊、眸子射酸風，看新局。 幽歎笑，猶可卜。琴已瘦，腸仍曲。逼人閒，坐闌山丘華屋。喝月曾驚草綠走，飛香差入叢紅宿。少待有、紫輦熱春雲，楊花撲。

夜遊宮

列寧格勒藏有長安詞，缺其後半。袁於英倫，曾見蝴蝶裝小冊，泥污日久，粘緊上下葉，內書此詞，僅白馬駢煙數字可辨。頃姚智小姐書來，稱已洗滌散開，錄示其文，足為延津之合。就中以「雨下占（沾）衣不覺斑」句為佳，喜極題此。記長吉詩云「長翻蜀紙卷明君」。錢飲光解為展玩明妃圖，今敦煌有明妃變文，卷末記云「立鋪畢」，可證也。

雨下沾衣蘸水。暮回首、家山千里。昔日長安宦遊子。踏新詞、度關山、歌地市。 露簡驚砂底。檢數葉、

客中立春

風定桂旗銷燄。雪花彈、深疑星點。隔窗晶屏阻一見。省同時、動春旂、催漏箭。 碧落游絲轉。夜初靜、

「夜遊宮」の序にいう事項に関連する記事が本誌第八号「雜記六〇・卷明君」にある。（一九八三・七・二九）

『社会科学戦線』一九七九年第一期掲載、方殷「痛懐老舎」に王礼錫氏の死の前後に触れた記事があるので、節略して紹介する。

一九三九年夏、わたしは老舎が“八方風雨”のうちに提唱したあの「戦地訪問団（作家戦地訪問団）」に参加した。かれは慰勞総会組織の慰勞団の北団に参加した。そのとき、わたしとかれは別々の経路を進んだ。……同年末、両団は前後して重慶に返った。かれはわたしに王礼錫の「死後のこと」についての処理をほめてくれた。王礼錫は当時、「戦地党政工作委員会」の特派員の身分で西北戦地の視察に出発し、「作家戦地訪問団」が訪問しようとする地区が同じであり、さらにかれが英国の「援華」運動に功のある人であり、……、といったことでかれは訪問団の団長を委ねられた。かれは不幸にもわれわれが山西の中条山を訪問したとき急に黄胆にかかり、洛陽に送って手当したが効なく、世を去った。かれの死後、わたしが中心になって、かれのために、洛陽竜門と白居易の墓とにはるかに相對する一個の山頭の墓地を選び「詩人王礼錫之墓」なる墓碑を立て、この詩人を葬った。老舎はこのことを例としてわたしの処理能力をほめてくれるのだが、わたしはかえってかなしく、万丈の烽煙のうちにあって好戦友を顧みることでもできず、心いたむばかりであった。

一九七三年七月四日から十五日にかけて「二〇世紀の李賀（四）王礼錫」を書き本誌第八号に載せた。その時にはわからなかったことを方氏の記事で知りえてうれしい。

なお、思いついて『中国文学辞典・現代第二分冊』（一九八二年・四川人民出版社）をみると、四五―四六頁に「王礼錫（1901―1939・8・25）」の項にかなり詳しく記述がある。旧稿に引いた橋川時雄の記事では王氏の生年は一八九九年だった。どちらが正しいのかわたしには判断がつかぬ。この辞典の通りなら三十九歳で死んだことになる。この人と直接交渉のあった入達のいる間にどなたかがこの革命詩人の伝記を書いてくださらないものか。

（一九八三年七月三十日一七一〇）

林 同 済

林氏については、本誌第十五号に「李賀詩歌集需要校勘」「兩字之差」なる氏の論文名をそのまま題として小文を書き、後者の末に「林氏のへ李賀集へ校勘の全貌が近い将来に出版されることを熱烈歓迎する」と記した。その後、中国で出る各種の人名辞典を繰ってみるが、氏の名は見えない。錢鍾書氏入洛の際の談話の記録を読むと、ああいう人名辞典は……ということ、あまりまともに考えない方がよいことがわかった。

『復旦学報』一九八一年第二期が来て見ていたら趙守根「林同済教授与漢学」（林同済教授とシェクスピア学）があり、読んで感動した。追悼論文だった。ただ、いつなくなっただのか、いくつだったのか、そういうことは書いてない。李賀との関わりについても触れていない。がとにかく、その摘要を紙きれに写した。ところが日付がぬけていて、いつのことだったかわからない。ここにはさらに縮めて写しておく。

教授は生涯不遇で、研究も度々主題を変更した。五十年代後期からシェクスピア校勘に集注し、一九六三年、英文論文「Sulliedisthe word」を書き、デンマーク王子の独白中のSolid fleshをsullied fleshかにつき考証し、一九八〇年に発表、英・米・日・独の学者に称賛された。文化大革命中、種々の圧迫をうけたが、その間に翻訳を進め、演出について考案した。この学問が、中国でようやくレールに乗りかけたときに、教授は世を去った。熟読・鑑賞・研究・評論・翻訳・演出から文献考証にいたる一門の総合科学だ、とかれは常にシェクスピア学をいていたが、かれはそれを体现した。

『中華文史論叢』一九八二年第一輯に林氏の遺稿「李長吉歌詩研究」が掲載された。一七一―九八頁。編者の按語にいう。

林同濟教授は中国・西洋の学問に通じ、わが国著名の西洋文学専門家で、中国古典文学にも深い素養があり、一九八〇年夏、招かれて英・米で講義し、過労のため不幸、米国で逝去した。十年の動乱期間、困難な環境で李賀歌詩の整理・研究に心をひそめ、十萬語に上るノートを書き、まっすぐな愛国知識人の仕事への献身と高度の責任観と学術において不断に真理を探索する費ふべき精神を表現した。その成果の一小部分はかつて『光明日報』『復旦大学学報』に発表、学術界の重視と好評を得た。李賀は唐詩の代表作家の一人で、その詩は南宋以降、注家が次々に、出、注釈・校勘に少なからぬ作業がある。ただ長期にわたる刊刻の誤りや注家のもつてまわった表現傾向から、詩旨になお開発すべきものがあり、校勘に正すべき処が多い。林氏は李賀詩歌の研究過程で前人の研究

成果を注意して吸収し、また旧説にとらわれず、西洋の文学研究の方法を結合し、詩意と勘誤の両面にあまたの創見を提出し、典故を示し、論理を通し、人の耳目を一新させ、おのずから一家の言となった。いま、手稿により、整理選択し「釈意」と「校勘」の两部分に帰納し総題を『李長吉歌詩研究』とし、林氏の中国古典文学研究成果の結晶として学术界に提供する。篇幅を節省するため、李賀の原詩は詩題のみをかかげ、あるいは関わる詩句のみ出して全詩はあげない。林氏校釈の李賀詩集全稿はなお整理校訂のうえ、別に処理されることとなろう。

以上の編者のことばのほか、林氏の手稿の写真四葉が二一—二四頁に収められる。林氏の引言を節録しよう。

長吉の詩はむかしからむつかしいといわれた。細読してみても、その十中八、九は理解しうるものがだんだんわかってきた。その理解しがたいものは、印刷上の誤りによるか、ことばの典拠不明による。しかもその少からぬ部分は注釈者がくだらぬ考えにとらわれ、わざわざ分りにくくしているからで、長吉はもととわかりにくかつたのではない。

で、整理のしかたは三つ。校勘によって本文を正す。注釈によって語義を明らかにする。解釈によって詩意を会得する。この三つの基礎に立ち、進んで鑑賞し、評価すれば、作者の創作の達成したものにつき、そのいずれが独創であり、いずれが成功しなかったかが体認でき、古人に負くなきに近いだろう。

長吉の歌詩は必ずよくよく校勘せねばならぬ。この仕事は一面細心、一面大胆でなければならぬ。……
解釈作業では各人の主観にかたよることは免れない。次の点に注意すれば、長吉の詩は読みにくくはない。

(一) 最も大切なのは章法を明かにすること。長吉の詩はすべて条理がある。その層次、段落を尋ねて解けば半ば以上わかる。

(二) 題旨をわきまえること。長吉は題詠はやらなかった。ただ、詩の内容と題とは密切な関係がある。題目に関係づけて読む、各詩製作の意図を摘出する、これが最も要領をえた方法だ。

(三) 文体別に考えること。突出するのが樂府体。樂府中でも「楚辭」を学び、「文選」を学び、李白を学ぶ各体がある。風格はきっぱり分れている。その各々の風格に従って会得すれば一切は自然でわかりやすい。旧解は儒家の道德觀・芸術觀にとらわれたものが多く、そいつをあてはめるのでとんでもない間違ひがおこる。このほか、抒情あり、感調あり、ドラマあり、写真がある。詠史についても古事をいたむもの、現代を諷刺するものがある。姚氏はほとんどどれもみな現代諷刺として解釈する、こじつけをまぬかれぬ。

(四) 語句を味わうこと。長吉が心臓をはき出すほどに苦心したのは多く一語一句の間にある。こまかくさぐってゆくと、往々、一句、あるいは一語のうちに全詩の主題と用意を見出す。輕易にやりすごしては、長吉にそむくことになる。鬼才だからわかりっこない、などがなりたてる者にいたってはまさに長吉の罪人だ。

長吉歌詩の特長は次の各条に帰することができよう。

(一) 生活の消極面から宇宙・人生の消息を見出すことにたくみで、精練の手筆で芸術美に昇華させる。この点フランスの詩人ボードレルによく似ている。あるいは、賀が没落貴族であるためこんな傾向があるのだろうか。

(二) 客観描写に主観を交えない手法に長じる。この点では近代西方の自然主義派に似る。で、その詩の特有の

風味は、きつぱりと筆を停め、意が言外に寄せられるところにある。

(三) 大胆な構想、大胆な造語。論者はかれの下筆の勁拔と言ひ古されたことばを使おうとしないことをたてえる。そうだ。この点では、韓退之が散文領域で陳腐なことばをつとめて除いたのと気味相通する処がある。

(四) 最後に重ねて指摘しておきたいのは、長吉の詩は結構にすぐれ、章法が井然としている点である。その辞句に眼くらんで、ついにその詩意に条理なしといつてはならない。長吉の詩がむつかしいと批評する者の病はみなこれをおろそかにするところにある。

わたしは、林氏のこれらの説に全く同感である。というより、わたしが四十年にわたって李賀の詩について言つて来たことが、林氏の説とつき合せて、ほとんど全く同じだった、というべきであらう。

とはいつても、「引言」に続く賀の詩の二々についての林氏の説と、わたしの考えとが常に合致するわけではない。その原因にはいろいろの要素があるが、氏が見ておられない（見ることができずに）と察せられる宣城本を、幸いにしてわたしは早くから見得たこと、李賀の伝をさぐつて、氏の氣づかれなかつたであらういくつかの賀の発想の根拠に思ひ至つたこと、禪伽經との関連において賀の詩を考えていること、わたしの無知不学が氏の説を理解することをさまたげていること、などにあらうか。

しかし、部分的な違いは、だれにもどこにもあることだが、大筋において、これほど同じように李賀の詩を見る人がいることを知つたのは大きな喜びであつた。だが、その人の存在を知つたとき、すでにその人は世を去つ

ていた。こんな悲しいことがあるのか。だが、これはわたしの私情にすぎぬ。李賀のために、かれより千二百年のちにもかれの芸術をかくあたたく正しく理解する人のあることを喜ぶべきであろう。

(一九八三年七月三十一日二一〇〇)

会 津 八 一 の 法 帖 (昭和五十四年刊)

一九八〇年六月、友人が、見てみるといつて持って来られた。六五―七四頁に李賀の「李憑箏篋引」の揮毫があつてなかなかいい。「解説」に『会津八一全集』第二巻所収「東洋美術史講義」の次の一節が引いてある。

「李賀は早熟にして空想的な天才詩人であつたがために、われわれは絵画的な表現よりも、もっと他の空想的な夢の様な刺激に襲われる。然し美術史を研究するものにとっては、彼の詩の中から史的研究をする何程かの材料を見出し得る。」

会津氏が李賀を愛したことは、早くから聞いていたが、その詩をたびたび揮毫したことは、この本ではじめて知った。かれの歌はわたしは二十代に愛読したが、李賀の詩と通じるところがあるのかもしれない。

李賀は、日本では、いわゆる中国文学の専家の間でよりも、他の分野の人々の間に愛読者が多いようだ。これは李賀にとって不名誉なことではない。かれの詩は「中国文学」という一つの地方文学ではなく、世界の人々に開かれた文学なのだ。中国の中国文学専攻の学者の書く論文より、シエクスピア学者の林氏の校注が心をうつ

は、このことと関わりがある。草森紳一氏の未完の李長吉伝が、さまざまな誤りを含みながらも圧倒的に面白いのはかれの感性と知識の根がおそろしく広い領域にのびているからであろう。かつてあの「長吉伝」を「不出来な作品」と評したら悪口を言うのだと受けとった人がいる。わたしは、あれが秀才の模範答案でないことを大いに讃嘆したのだ。杜国清氏の「*Li Changji*」はアメリカでのシリーズの一冊という条件があり、氏としては満足しないものであろうが、しかも、すぐれた李賀概論となっているのは、中国語で数々の詩集を出し、ボードレールの悪の華の中国語全訳をやりとげた詩人であることとかかわるに違いない。

(一九八三年八月一日一七〇〇)

劉

辰

翁

劉氏が李賀の詩集の最初の評釈者であることは誰もが知っている。わたしもずいぶん長い間お世話になった。しかしその詳しい経歴は知らなかった。調べようと思いながらそこまで手が及ばなかった。『詞学』第一輯(一九八一年・華東師範大学出版社)に載った馬群「劉辰翁事跡考」を読んで渴を医した。

劉氏は一二三二年に生れ一二九七年六十六歳で死んだ。宋の滅亡を眼のあたりに見、その遺民として古典の評釈に心情を託して生涯を終えた。李賀がその評釈の最初の作業であり、また最も心を尽したもののらしい。文集も百巻からあったらしいが、早く散失し、後人の集めたものが十巻ほどのこっているにすぎないらしい。それも中手に入れないが、詞は読むことができる。かれより七百年のちに生れたわたしは、何も知らずに李賀を読み、

史記を読み、漢書を読み、老子を読み、莊子を読み、列子を読み、世説を読み、王維を読み、杜詩を読み、そして李清照を読みながら、かれの死の年に近づいていた。もとよりわたしは、かれのような烈士ではなく、学者でもなく、文人でもない。しかし好みにおいて相似たところがあったというところに「縁」の近さを感じる。かれにとつては迷惑であろうが。

(一九八三年八月一日二〇三〇)

『李賀研究』終刊のごあいさつ

一九七一年一月本誌を創刊して、こととして満十二年になる。その間に発行したのはわずかに十六号にすぎない。あれこれ雑多に取りあげたが、李賀の詩について何ほどのことも解けたわけではない。「小さな硯」ながら水が尽きた訳でもない。しかし、わたしはいま数えて六十五歳であり、死んだ父より十歳も年を食い、とりたてた病はなくとも、あとに幾つか仕事をかかえているので、ここらを機に小誌を閉じることにした。

体裁粗末、内容粗漏の小雑誌が、開店休業のような期間を幾度かはさみながらも、今日まで持続しえたのは、一つは読者諸賢の温いご支持により、一つは朋友書店の土江澄男夫妻ならびに店員諸君の篤い友情による。

まずこのことを記して感謝の微意を述べずにはおれぬ。

わたしが李賀を読みはじめたのは一九三三年前後、すなわち五十年前である。当時、中国文学専攻の人でも李賀の名を知らない人があった、というところの今の方々は信じられないだろうが、事実であった。しかしその年、漆山又四郎氏の訳注が出版され、日夏耿之介、佐藤春夫などの諸氏の紹介・翻訳によって文芸を愛する人々の間にその名

が水のしみるように波及しつつあった。

一九五三年、雑誌『方向』を出し、李賀について語りはじめたのは、一人の素人愛読者としてで、専門の方々がやって下さるようになればいつでも観客席におりるつもりであった。ついでぐずぐず舞台の端っこにひっかかったまま馬齢を重ねたが、素人であることは束の間も忘れたことはない。今では専門家も多く、専門外の人でも李賀を読むための基礎はかなりととのった。わたしが観客席におりる時機はとつて来ていた。李賀を読むことはおそらく死ぬまでやめられまい。他の方々の作業も眼にふれる限り読まずにはいられまい。それらはわたしの残年の大きな喜びとなることであろう。

李賀を愛するがゆえに拙いわたしを長く支持された方々に重ねて感謝し、李賀について研究し、翻訳し、創作し続けられる諸賢の文安を、切に祈念いたします。

『李賀研究』終刊号を、四十年前に「牛のごとくねばり強くあれ」とさとされた兼子悦治氏にささげます。

終りに、李賀の独吟連句にちなみ、へたくそな独吟歌仙「幻城」の一巻を、お笑い草までに。

初オ 幻の初詣せむ羅婆那夜叉

楞伽の城にぬかる御降

緑もえ霞さまよふ焼野にて

耕す牛を小突く女童

蛤を拾へば屋の月ゆらぎ

街角のポスト 黒き自転車

ウ 戦争と疫病 地球にばらまかれ

海を隔てて苦がき恋する

ぼろ靴のあまりいとしく触れ難し

夕顔のはな見てをりし間に

莊子去り王維去り韓愈去り

打字機たたいてへば歌仙まく

停電の庵室の窓 月させば

毒茸ばかり臭ふ古里

立琴はあれど聞かせむひとまさず

爪をとぎたる男まねかむ

麗らかに花さくあした退職し

ペンペン草の丈の高さよ

名オ ふわふわとシャボン玉飛ぶあと追へど

鼻はいつでも目より突き出て

宝塔並坐 久遠本仏 地湧菩薩

転説の波しきり騒だつ

滝凍り声なく冬の虹懸り

風邪ひきし夜は生姜酒煮る

ゴキブリよりも猛きマイカー 国に満ち

踏みにじられし燕子楼悲歌

はなだ色の壺に少年うち沈め

鉛の涙 魚のまなぶた

月来たり庭の穂蓼を照すかな

あきすにつらき露霜の宿

ウ 施餓鬼船仕たてて何処へ改たんか

天は茫茫 夢は漠漠

わびしくもまた面白き遍歴に

サンチョ・パンザの一人だになく

がらくたの荷はすべて捨て花の暮

『李賀研究』のはてや春風